

専門職向け



ガイドラインの
ポイント!

令和6年度に「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン」が改訂されました。ガイドラインでは日常生活や社会生活等において、認知症の人の意思が適切に反映されるよう、意思決定支援の標準的なプロセスや留意点を記載しています。

本リーフレットはガイドライン内容を反映し、主に医療介護等の専門職の方が認知症の人の意思決定支援時に留意すべきポイント等を記載しています。

ガイドライン
はこちらから



事例集は
こちらから



認知症の人への“意思決定支援”できていますか?

認知症の人の意思決定を支える際、**プロセス(人的・物的環境の整備、意思形成支援、意思表明支援、意思実現支援)**を踏んで支援することを基本としています。日頃の業務等から、認知症本人と何か決める際や、本人に関して何かを決める場面を思い描き、関わりを振り返ってみましょう。

意思決定支援のプロセスにおけるチェックポイント

process
01

人的・物的環境の整備

- 本人の意思を尊重し、安心感がもてる丁寧な言動で接すること
- 本人のこれまでの生活史を家族関係も含めて理解すること
- 丁寧に本人の意思を、その都度確認すること
- 本人との信頼関係に配慮すること
- 意思表明の相手方との関係性から、自らの意思を十分に表明できるよう配慮すること
- 本人の慣れた場所で、意思決定支援を行うこと
- 本人を大勢で囲んでいないか配慮すること
- 本人が集中できる時を選んだり、疲れている時を避けること
- 意思決定しない自由もあるため、意思決定を強制することがないように注意すること
- リスク等をチームで共有すること
- 支援のプロセスを記録し、振り返ること

process
02

意思形成の支援

- 本人が意思を形成するのに必要な情報を説明すること
- 本人が理解できるよう、分かりやすい言葉や文字に変えて、ゆっくりと説明すること
- 本人が理解していることと支援者らの理解に相違がないか確認すること
- 本人が何を望むかを、オープンな形で尋ねること
- 説明した内容を忘れてしまうこともあるので、都度、丁寧に説明すること
- 可能な限り複数の選択肢を示し、比較のポイントや重要なポイントを分かりやすく示すこと
- 言葉だけではなく、文字にして確認できるようにしたり、図や表等を使い説明すること
- 理解している反応でも実際は理解が難しい場合があるので、本人の様子を見ながら確認すること

process
03

意思表明の支援

- 本人と時間をかけてコミュニケーションを取ること
- 非言語コミュニケーションについても、意思表明として重視すること
- 決断を迫るあまり、焦らせないように配慮すること
- 時間の経過や本人が置かれた状況等によって意思は変わることもあるため、本人の状況を確認し、必要に応じて意思を再確認すること
- 重要な意思決定の場合には、表明された意思について時間をおき、再確認することや複数の意思決定支援者で確認すること
- 本人の表明した意思が、本人の生活歴や価値観等から見て整合性がとれない場合や、表明した意思に迷いがあると考えられる場合等は、本人の意思を形成するプロセスを振り返り、改めて、本人の意思を確認すること

process
04

意思実現の支援

- 適切に形成され表明された本人の意思を、本人の能力を最大限活用した上で、日常生活・社会生活に反映すること(支援チームが多職種で協働し、利用可能な社会資源等を用いて、反映させる)
- 本人の意思が合理的でない場合でも、その意思の実現を支援すべきことを理解すること(同時に本人の意思を実現することが、他者を害する場合や本人にとって見過ごすことができない重大な影響がある場合は、その限りでないことを理解する)
- 本人が実際に経験をjする(例:ショートステイ体験利用)と意思が変わることもあるので、本人にとって無理のない経験を提案することも有効な場合があることを理解すること

認知症の人への“意思決定支援”のポイント

ガイドラインが対象とする支援の場面

ガイドラインは日常生活・社会生活において意思決定が必要な場面で活用します。例えば、何を着るか、何をかうか、どのサービスを利用するかなど、日常の些細な場面から社会生活、人生の岐路まで様々場面が想定されます。



留意点

- ☑ 本ガイドラインは、本人の意思決定が困難な場合に、第三者が本人に代わって意思決定を行う「代理代行決定」を示すものではありません。
- ☑ 全ての認知症の人が意思決定支援を必要としているわけではないことに留意しましょう。

まずは心得!

ご本人の意思の尊重

ガイドライン P9~

事例集 事例 4・5・7

- 認知症の人が、一見すると意思決定が困難と思われる場合であっても、意思決定しながら尊厳をもって暮らしていくことの重要性について認識しましょう。
- 本人の意思を尊重するために、本人が有する認知能力に応じて、理解できるように説明しましょう。
- 本人の意思の内容を支援者の視点で評価し、支援するかどうかを決めるのではなく、まずは本人の表明した意思・思考を確認し、本人の意思の確認がどうしても難しい場合には、推定意思・選好(好み)を確認しましょう。
- その際、これまでの価値観や生活歴のみを重視するのではなく、現在の表情や本人が発する言語・非言語メッセージから得られる情報も活用しましょう。
- 自ら意思決定できる早期の段階から本人の意思を確認し、記録を残しましょう。

日常生活・社会生活等における意思決定支援のプロセス

01 人的・物的環境の整備

ガイドライン P14~

事例集 事例 2・4・5・6・7・8

- 1 意思決定支援者の姿勢
- 2 意思決定支援者との信頼関係、意思表明の相手方との関係性への配慮
- 3 意思決定支援と環境

02 意思形成支援

適切な情報、認識、環境の下で意思が形成されることへの支援

ガイドライン P16~

事例集 事例 1~6

- 本人の意思形成の基礎となる条件の確認
- 必要に応じた丁寧な繰り返しの説明
- 本人の正しい理解、判断となっているかの確認

03 意思表明支援

形成された意思を適切に表明や表出することへの支援

ガイドライン P16~

事例集 事例 4・6・7・8

- 意思表明の場面における人的・物的環境の確認や配慮
- 表明の時期、タイミングの考慮
- 意思表明の内容を時間を置き確認、また、複数人での確認
- 本人の信条、生活歴・価値観等の周辺情報との整合性の確認

04 意思実現支援

本人の意思を日常生活・社会生活に反映することへの支援

ガイドライン P18~

事例集 事例 1

- 意思実現にあたり本人の能力を最大限に活かすことへの配慮
- 意思決定支援チーム(多職種協働)による支援
- 形成と表明された意思の客観的合理性に関する慎重な検討と配慮

各プロセスで困難や疑問が生じた場合は、チームによる会議の実施

ガイドライン P19~

事例集 事例 4・5・7

意思決定支援のプロセスの記録、確認、振り返り